神奈川芸術プレス

vol.164

KANAGAWA ARTS PRESS

2024年（令和6年）3月21日発行

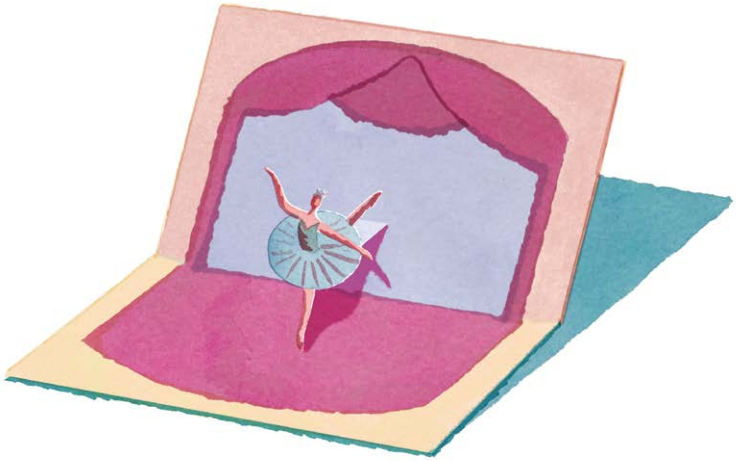
特集 声をとどける――言葉・うた・音楽

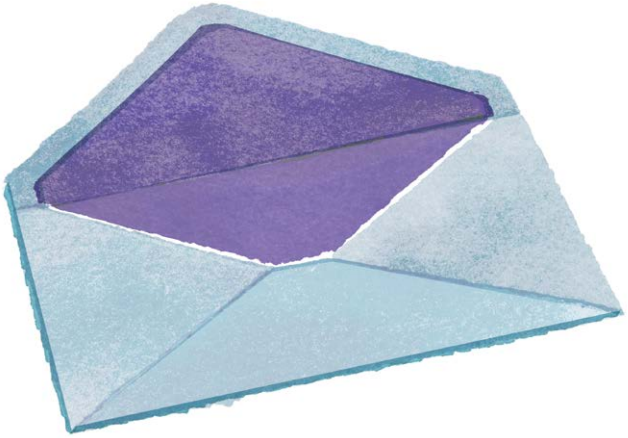
［オペラ］『ジュリオ・チェーザレ』インタビュー：藤木大地、［演劇］『SHELL』対談：杉原邦生×原口沙輔、
［バレエ］『ファンタスティック・ガラコンサート2023』インタビュー：上野水香、
［伝統芸能］「かながわ伝統芸能祭」／横浜能楽堂

COLUMN 杉山洋一　INTERVIEW 青柳菜摘、環ROY　TOPIC 茅ヶ崎FM

連載 アートシーンプレイバック、つなぐ――社会と芸術、公演の舞台裏

公益財団法人
神奈川芸術文化財団





目次

04 特集 声をとどける――言葉・うた・音楽

オペラ　『ジュリオ・チェーザレ』インタビュー：藤木大地（カウンターテナー）
演劇　『SHELL』対談：杉原邦生（KUNIO主宰／演出家／舞台美術家）× 原口沙輔（音楽家）
バレエ　『ファンタスティック・ガラコンサート2023』インタビュー：上野水香（東京バレエ団 ゲスト・プリンシパル）
伝統芸能　「かながわ伝統芸能祭」／横浜能楽堂

13 COLUMN
人生肺魚訓　杉山洋一（作曲家／指揮者）

14 INTERVIEW
青柳菜摘（アーティスト／コ本やhonkbooks主宰）
環ROY（ラッパー）

16 TOPIC
茅ヶ崎FM

17 連載 REGULAR FEATURE

18 アートシーンプレイバック
2023年下半期の音楽プログラムをふりかえる
文：八木宏之（音楽評論）
2023年下半期のキッズプログラムをふりかえる
文：住吉智恵（アートプロデューサー／RealTokyoディレクター）

22 つなぐ――社会と芸術
みんなのスマイル・コンサート

23 公演の舞台裏
ヘアメイク編　谷口ユリエ（ヘア＆メイクアップアーティスト）

24 神奈川芸術プレス｜読者アンケート
ご支援のお願い
（公財）神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

（公財）神奈川芸術文化財団について

1993年10月に設立された神奈川芸術文化財団は、以下3つの県立文化施設の運営と、芸術文化の創造・普及に一体的に取り組んでいます。

神奈川県民ホール

神奈川県民ホール（以下、県民ホール）

1975年、全国屈指の大型文化施設として開館。大型の舞台機構を備える大ホール、オルガンが設置された小ホール、ギャラリー、会議室等を有する多目的ホールです。オペラ、バレエ、コンサートから各種大会・式典、美術作品の展示まで、多彩な催しが行われています。

〒231-0023　神奈川県横浜市中区山下町3-1
TEL：045-662-5901（9:00～17:00）
https://www.kanagawa-kenminhall.com/

2024年度ラインアップはこちら
https://www.kanagawa-kenminhall.com/news_detail/2420

KAAT 神奈川芸術劇場

KAAT神奈川芸術劇場（以下、KAAT（カート））

2011年、モノをつくる（芸術の創造）、人をつくる（人材の育成）、まちをつくる（賑わいの創出）の「3つのつくる」をテーマとする創造型劇場として開館。最大約1,200席のホールのほかに、大スタジオ（約220席）と、3つのスタジオを有します。

〒231-0023　神奈川県横浜市中区山下町281
TEL：045-633-6500（10:00～18:00）
https://www.kaat.jp/

2024年度ラインアップはこちら
https://www.kaat.jp/news_detail/2413

木のホール 神奈川県立音楽堂

写真：青柳聡

神奈川県立音楽堂（以下、音楽堂）

1954年、公立施設としては日本で初めての本格的な音楽専用ホールとして開館。前川國男設計による戦後モダニズム建築の傑作として評価されています。ホールの壁面はすべて木でつくられ、その美しい響きで愛されています。2021年に神奈川県重要文化財に指定。

〒220-0044　神奈川県横浜市西区紅葉ケ丘9-2
TEL：045-263-2567（9:00～17:00 月曜休館）
https://www.kanagawa-ongakudo.com/

2024年度ラインアップはこちら
https://www.kanagawa-ongakudo.com/news_detail/2414

オペラ

声をとどける――言葉・うた・音楽

「声」は舞台芸術における一つの重要な表現媒体です。オペラ歌手は歌い、役者は語り、あるいはバレエダンサーは身体で声をとどける――。伝統芸能においても、うたや語りは大きな役割を担ってきました。この特集では、複数ジャンルへの取材を通して声の魅力をおとどけします。

16世紀末から17世紀初頭にかけてイタリアで誕生したオペラは、古代ギリシャ悲劇をモデルに、人間の感情を歌に乗せて、話すように表現することを目指しました。音楽、文学、演劇、ダンス、美術など、様々なアートが舞台上で交錯するオペラは総合芸術とも呼ばれ、誕生以来400年もの間、人々を魅了し続けています。オペラ上演の華である歌手たちは、時代に応じてスタイルを変化させながら、その磨き上げられた声で人々の心を震わせてきました。

取材・文：八木宏之
公演写真：ヒダキトモコ

音楽堂室内オペラ・プロジェクト第6弾

鈴木優人指揮 バッハ・コレギウム・ジャパン
ヘンデル『ジュリオ・チェーザレ』全3幕

指揮・チェンバロ：鈴木優人
管弦楽：バッハ・コレギウム・ジャパン
演出：佐藤美晴
出演：
ティム・ミード（カウンターテナー）
森 麻季（ソプラノ）
マリアンネ・ベアーテ・キーラント（アルト）
加藤宏隆（バス・バリトン）
松井亜希（ソプラノ）
アレクサンダー・チャンス（カウンターテナー）
大西宇宙（バリトン）
藤木大地（カウンターテナー）
日程：2023年10月14日
会場：神奈川県立音楽堂
主催：神奈川県立音楽堂

演出の佐藤美晴は、オーケストラを囲むようにステージを配置し、限られたスペースを巧みに生かしながら、聴衆を古代ローマ時代のエジプトへと誘いました

10月14日に音楽堂で上演されたヘンデルの『ジュリオ・チェーザレ』は、1724年にロンドンで初演された、バロック時代を代表するオペラの一つです。本公演で、ニレーノ役として出演したカウンターテナーの藤木大地さんに、お話を聞きました。

REPORT

ヘンデルの生前に上演された『ジュリオ・チェーザレ』では、カストラート*1たちが超絶技巧を競い合い、大喝采を浴びていましたが、今日ではカウンターテナー*2がカストラートの役を現代の技術で歌い上げます。今回の上演でも、チェーザレ役のティム・ミード、トロメーオ役のアレクサンダー・チャンス、ニレーノ役の藤木大地、3人のカウンターテナーが躍動し、真珠のような美しい高音で満席のホールを満たしました。クレオパトラ役の森麻季、コーネリア役のマリアンネ・ベアーテ・キーラント、セスト役の松井亜希、クーリオ役の加藤宏隆、アキッラ役の大西宇宙など、そのほかのキャストにも国内外の名歌手たちが集い、バロック・オペラの醍醐味というべき声の饗宴が実現。とりわけ森と藤木のコンビは、歌だけでなく、ユーモラスな演技も大いに光り、300年前の作品を現代へとつなぐ見事な橋渡しを務めました。鈴木優人率いるバッハ・コレギウム・ジャパンは、バロック時代の古楽器から切れ味鋭いスタイリッシュな音を響かせ、時に歌手たちをリードしながら、上演を成功に導きました。現代のプロフェッショナルたちによって新たな命を吹き込まれた時、バロック・オペラは時代を超えて聴衆を熱狂させ得ることを示した一夜となりました。

藤木大地

インタビュー

――『ジュリオ・チェーザレ』の神奈川公演は満員御礼の大成功でした。

SNSを通じて兵庫と東京公演の評判が広まったことが、神奈川公演の完売につながりました。今はオペラも、レストランのように口コミを見てからチケットを買う時代。公演の情報ができるだけ人目に触れることも大切だと思います。

バッハ・コレギウム・ジャパンによるバロック・オペラのプロジェクトは、古楽オーケストラの演奏でバロック・オペラを上演する、日本では画期的な試みです。『ジュリオ・チェーザレ』はその第3弾*3となりますが、毎回出演させていただけて、大変光栄に思っています。

――藤木さんは2022年10月に新国立劇場で『ジュリオ・チェーザレ』が上演された際には、悪役のトロメーオ役を演じられましたが、今回は狂言廻しとも言うべきニレーノ役での出演でした。藤木さんの伸びやかな歌声とコミカルな演技は作品に大きな推進力を与えていましたね。

ニレーノはアリアこそ一つですが、舞台にいる時間が長い重要な役です。ニレーノを演じることで、トロメーオの時とは異なる、全体を俯瞰する視点が得られました。限られたリハーサルで試行錯誤しながら、自分なりのニレーノをつくり上げていきましたが、お客さんにそのキャラクターを楽しんでいただけてとてもうれしかったです。

――藤木さんはカウンターテナーという声種の特性上、バロック時代の作品を歌われることが多いかと思います。300年前に書かれた音楽を現代のお客さんに届けるうえで意識していることはありますか？

18世紀の歌手たちがどのように歌っていたのか、私たちはその録音を聴くことはできません。カストラートに会って話を聞くこともかないません。古楽器は今日まで残っていますが、歌は人間の身体が〝楽器〟である以上、手がかりは少ないのが現実。バロック時代と今日では、気候や食事など、歌手をとりまく環境も異なります。それでも楽譜を分析したり、資料を読み込んだりすることで、作曲家の生きた時代のスタイルに近づけることは可能です。とはいえ、深く考えすぎると自然に歌えなくなってしまうので、技術を磨き、今できることを精一杯やるようにしています。

――ヨーロッパの文化であるオペラは長い時間をかけて、少しずつ日本に定着してきましたが、まだまだ敷居が高いと感じる人も多く、受容は道半ばです。藤木さんが考えるオペラの魅力は？

まず何より、歌手たちの〝声〟にあると思います。声は皆が持っている身近なものですが、オペラ歌手の歌を聴けば誰もが「人間は鍛えたらこんなにすごい声が出るのか！」と驚くでしょう。人間の身体に秘められたポテンシャルを楽しむ点は、スポーツ観戦にも似ていますね。そんな声の魅力に加えて、指揮者やオーケストラ、舞台装置など、非日常の世界が詰まっているのがオペラです。レストランを予約して、ディナーに期待を膨らませるのと同じように、チケットを買って、公演の日をワクワクしながら待つのもまたオペラの魅力でしょう。劇場で3時間じっと座っているからこそ得られる、スマートフォンでは味わえない特別な体験がオペラにはあります。ぜひ一度、劇場で、オペラの非日常を体験してみてください。

写真：西野正将

藤木大地 ふじき・だいち

2017年、オペラの殿堂・ウィーン国立歌劇場のライマン『メデア』にヘロルド役で東洋人初のカウンターテナーとしてデビュー。2012年、第31回国際ハンス・ガボア・ベルヴェデーレ声楽コンクールにてハンス・ガボア賞を受賞。同年、日本音楽コンクール第1位。2013年、ボローニャ歌劇場にてグルック『クレーリアの勝利』マンニオ役でヨーロッパデビュー。国内では、主要オーケストラとの公演や各地でのリサイタルがいずれも絶賛を博している。日本が世界に誇る国際的なアーティストの一人。
洗足学園音楽大学客員教授。
横浜みなとみらいホール初代プロデューサー（2021-2023）。
Official Website：www.daichifujiki.com

*1　変声期を迎える前に去勢することで、女性のような高音を男性の声量で歌うことができた歌手たちのこと
*2　西洋音楽における成人男性歌手のパートの一つで、女声に相当する高音域を歌う。カウンターテノールとも言う
*3　音楽堂室内オペラ・プロジェクトとしては第6弾

演劇

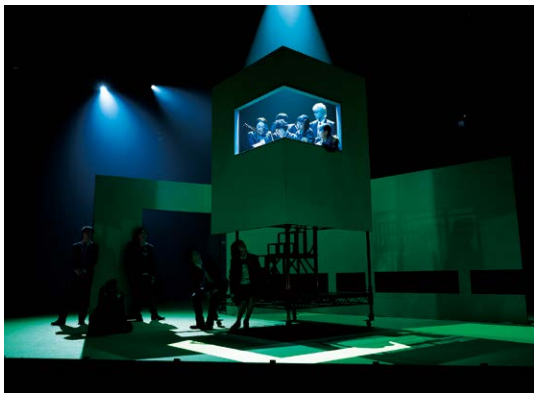
取材・文：山﨑健太
公演写真：引地信彦

紀元前5世紀の古代ギリシャで誕生した西洋演劇。神話などを題材に、演技や音楽などの要素が早くから含まれていた芸術形式です。時代とともに、戯曲で描かれる主題や人間の姿は変化し、演出技術も発展していきました。戯曲の言葉は、何世紀にもわたり語り継がれる可能性があるテキストです。照明・音響・美術など様々な要素のなか、舞台の上に生身の人間が立つ。その身体が発する“声”によって戯曲の言葉を聴くことは、演劇の醍醐味の一つかもしれません。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

SHELL

作：倉持 裕
演出：杉原邦生
音楽：原口沙輔
出演：石井杏奈　秋田汐梨
　　岡田義徳　ほか
日程：2023年11月11日～26日
会場：KAAT神奈川芸術劇場　ホール
主催・企画制作：KAAT神奈川芸術劇場



KAATで数々の作品を上演してきた杉原邦生さんと、倉持裕さんの初タッグ、そして20歳の新進気鋭の音楽家・原口沙輔さんが初めて舞台音楽を手がけたことでも話題になった『SHELL』。創作のプロセスや、演劇・音楽を通して伝えるという営みについて、杉原さんと原口さんにお話を伺いました。

ABOUT

ある日、ビルの上階からマネキンが落ちてくる現場に遭遇した未羽（みう）は、同じくその場に居合わせた中年男・高木の顔が、同級生・希穂（きほ）の顔にも見えるという不可思議な体験をします。「あの中年男は確かに希穂だった」。混乱した未羽は翌日学校で「あそこで何をしていたのか」「あれはどういうことなのか」と希穂を問い詰めますが「そんなことは知らない」と突っぱねられてしまいます。しかし、やがて未羽のしつこさに根負けした希穂は事情を打ち明けることに。その「事情」は驚くべきものでした。実は世界には複数の姿を持った人間が一定数いて、希穂もその一人だというのです。希穂には高木のほかにも盲目の老女・長谷川としての姿もあり、それぞれに関係を持つことなく別々の人生を送ってきました。しかし、それを見抜く能力を持った未羽が現れたことで、無関係だったはずの人生は交わりはじめ――。

「貌（かたち）」をシーズンタイトルに掲げた2023年度の劇場プロデュース作品にふさわしく、もし複数の顔を持って生きる人がいたら？という〝if〟の世界を描いた本作。私たちの現実とは少しだけ、しかし決定的に違う世界を通して浮かび上がってくるのは、人と人との関わり合いをめぐる問題です。テクノロジーの発達やSNSの普及で急速に変化する私たちのコミュニケーションは世界をどう変えていくのでしょうか。

対談

杉原邦生 × 原口沙輔

――音楽を原口さんにというのは杉原さんのご希望だったと伺いました。

杉原　《平成終わるってよ》という曲を初めて聴いたのが2018年のことでした。その時、肩の力が抜けているというか、歌詞がしゃべり言葉の延長みたいな感じで入ってくるのがすごく新鮮だった。それで、こういう音楽家が舞台の音楽をやったらどうなるんだろう、いつかご一緒したいと思い続けていたんです。今回の『SHELL』が高校生の物語だということで、世代が近い人にしかキャッチできない感覚も入れたいと思って、これは原口さんにお願いするチャンスだなとご依頼しました。

原口　色々なジャンルがあるなかで、演劇のお話をいただいたのは意外だったんです。でも、演劇って音が流れてその場で生で俳優の皆さんが動くものですよね。これは面白いぞと思って快諾しました。もともと僕は、何か作品に触れると、自分のなかで勝手に音をつけてしまう癖があるんです。だけど、例えば小説を読んで、テーマソングをつくりましたって勝手に出すのはちょっと違うなという気持ちもあって。だから、こうやって依頼されて、台本を読んでそこからつくった音楽を堂々と出せるというのは、僕にとってすごくありがたい機会でした。

――舞台と普段の音楽活動とでは取り組み方は変わってきますか？

原口　全然違いますね。自分の曲でも名義によって違うんです。SASUKEの時は自分のことは歌ってない。世の中で起きている色々な出来事を取り入れたり、世の中に生きている色々な人間が一つになってつくった曲みたいなのをつくりたいと思ってやっています。本名の原口沙輔の時は自分の気持ちのままの歌詞や音を出してる。他人に何かを話す時って、わかってもらうために頭の中にあるものを整理してから口に出しますよね。でも、そうやって口に出す前の心の動きみたいなものをそのまま出したいと思って曲をつくってるんです。人に曲を提供する時はまた別で、その人に憑依するようなつもりで書いています。その世界に入ってつくるという意味では今回の劇伴も近いところがあるかもしれません。

『SHELL』の世界というのは僕たちが今生きている世界と似てはいるけどだいぶ違う。そういう世界の音楽というのは、僕たちが聴くとやっぱりちょっと違和感があると思うんです。今回はそういう全体のイメージを枠として設定してから、杉原さんのオーダーに応えるかたちで個々の曲をつくっていきました。例えば音とかメロディーとか、最初につくったテーマ曲の素材をほかの曲でも使うことで、全体に共通の雰囲気をもたせるということもしています。

杉原　演劇って音楽性がすごく大事だと思っていて、僕はどんな作品でも全体で一曲の音楽みたいなつもりでつくっているんです。だから、組む音楽家で作品が大きく変わってくるし、稽古も音響さんがいないと具体的なイメージがつかみづらい。かつての演劇は聴く芸術でした。ギリシャ悲劇の劇場はものすごく広くて、後ろのほうの席からだと俳優は豆粒くらいにしか見えません。それでも、台詞は遠くまで届くように設計されていた。ロンドンのグローブ座だってスタンディングで、観客はライブみたいにシェイクスピアの台詞を聴きに来ていたわけですよね。

現代の演劇は色々な要素で見せられるようになってるから、音楽性は一番じゃない。それでも、音楽によって俳優の動きも台詞の言い方も変わってくるし、逆に俳優がどういう台詞を言ってその音楽が流れるかによって伝わるイメージも変わる。そうやって全部が組み合わさったところに生まれてくるものが演劇の面白さだと思うんです。

原口　僕は今回、本番を見て、お客さんの前で音が鳴ることでようやく作品が完成したなと思ったんです。僕がつくった音が作品のほかの要素と合わさることで、舞台の上で想像以上のものが生み出されていた。また一緒に舞台の仕事もしたいですね。

原口沙輔さん（左）と杉原邦生さん（右）　衣裳協力（杉原邦生）：ANTOS.
写真：西野正将

杉原邦生　すぎはら・くにお
東京都出身、神奈川県茅ヶ崎市育ち。2004年、プロデュース公演カンパニー“KUNIO”を立ち上げ、これまでに『エンジェルス・イン・アメリカ』『ハムレット』『グリークス』や太田省吾作品を鮮烈に蘇らせた『水の駅』『更地』などを上演。2018年（平成29年度）第36回京都府文化賞奨励賞受賞。近年の主な作品にCOCOON PRODUCTION 2022 NINAGAWA MEMORIAL「パンドラの鐘」、ホリプロ『血の婚礼』、歌舞伎座『新・水滸伝』、木ノ下歌舞伎『勧進帳』、PARCO PRODUCE 2024『東京輪舞』などがある。

原口沙輔　はらぐち・さすけ
愛媛県出身。2歳からダンス、5歳からGarageBandで作曲を始め、10歳でニューヨークのアポロ・シアター「アマチュアナイト」に出場し、日本人最年少で優勝。14歳の頃、原宿での路上ライブがSNSで拡散、注目されメジャーデビュー。新しい地図joinミュージック、郷ひろみほかアーティストへの楽曲提供、テレビ番組やCM曲の提供、東京2020パラリンピック閉会式出演および音楽制作を担当。『SHELL』で初めての舞台音楽を手がける。

バレエ

バレエの起源はルネッサンス期のイタリアとされ、宮廷での余興でした。16世紀になるとフランスに伝わり、舞台舞踊として開花します。19世紀前半から半ばに西欧でロマン主義の影響を受けたロマンティック・バレエが栄え、19世紀後半にロシアで古典的様式美を伴うクラシック・バレエが確立します。バレエ＝舞踊劇は、劇場芸術の華。20世紀初頭にはバレエ・リュス*1が従来の様式を革新し、現在も先鋭的な舞踊を取り込むなど発展を続けています。

*1　セルゲイ・ディアギレフが主宰し1909年から1929年に活動したバレエ団。20世紀の芸術に大きな影響を及ぼした

取材・文：高橋森彦
公演写真：長谷川清徳

神奈川県民ホール　年末年越しスペシャル

ファンタスティック・ガラコンサート2023

県民ホールの年末の風物詩『ファンタスティック・ガラコンサート2023』が2023年12月29日に開催されました。オペラ、バレエ、オーケストラの魅力を一挙に楽しめる人気公演です。本公演に出演したバレエダンサーの上野水香さんに、バレエの魅力や身体を通して届ける「声」についてお話を聞きました。

指揮・お話：三ツ橋敬子
ソプラノ：青木エマ
テノール：城 宏憲
バリトン：三戸大久
バレエ：
上野水香（東京バレエ団）
厚地康雄
ブラウリオ・アルバレス（東京バレエ団）
ヴァイオリン：石田泰尚
ピアノ：中島 剛
オルガン：中田恵子
（神奈川県民ホール オルガン・アドバイザー）
管弦楽：神奈川フィルハーモニー管弦楽団
コンサートマスター：大江 馨
演出（トスカ）：舘 亜里沙
日程：2023年12月29日
会場：神奈川県民ホール
主催：神奈川県民ホール

REPORT

『ファンタスティック・ガラコンサート2023』のテーマは「愛の抱擁」でした。指揮・お話は三ツ橋敬子、管弦楽は神奈川フィルハーモニー管弦楽団。

オペラではプッチーニ作曲『トスカ』ハイライトを上演。トスカを青木エマ、カヴァラドッシを城宏憲、スカルピアを三戸大久が務め、劇的な愛憎劇を濃密に歌い上げました。

バレエでは、チャイコフスキー作曲『白鳥の湖』を披露。前半に第2幕アダージョを上演しましたが、演奏をオーケストラではなく、ヴァイオリンの石田泰尚、ピアノの中島剛が務めて新鮮でした。上野水香が白鳥オデットを、厚地康雄が王子を踊り、指先まで神経の行き届いた繊細な踊りから愛の会話が浮かび上がります。そして後半に第3幕 黒鳥のパ・ド・トロワを披露し、黒鳥オディールの上野、王子の厚地、悪魔ロットバルトのブラウリオ・アルバレスの妙技とともに愛や思惑が交錯し、ドラマは最高潮に達しました。

バレエはオペラ同様にクラシック音楽において演じられる総合芸術ですが、歌声を用いないバレエの魅力とは何でしょうか。『ファンタスティック・ガラコンサート』に接すると、バレエがいかに身体表現を突き詰めた芸術形態であるかという事実を肌で実感できます。躍動する美が物語るドラマであるバレエの妙味を再発見しました。

ファンタスティック・ガラコンサート 2024
12月29日開催決定!

県民ホール休館前、最後のファンタスティック・ガラコンサート。
指揮・三ツ橋敬子さん、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、上野水香さんなどおなじみの出演者で贈ります。どうぞお楽しみに!

上野水香 インタビュー

―バレエならではの魅力とは？

バレエの一番の特徴は、オペラやミュージカルとは違って台詞がないことです。私たちが舞台で何か同じ所作や仕草をしても、人によって受け取り方は千差万別です。足の出し方一つとっても、作品・役柄によって心情がそれぞれ違うので、表現する側としても無限大の可能性を秘めています。言葉で直接的に語る方がわかりやすいかもしれませんが、言葉がない分、奥の深さや広がりがあって、心により深く訴えかけることができるのではないでしょうか。言葉がないという壁を感じる方がいらしても、一度体験してもらえるとこういうものなんだなと魅力をわかってくださると思うので、ぜひ足を運んでいただきたいですね。

写真：菅原康太

上野水香 うえの・みずか （東京バレエ団 ゲスト・プリンシパル）
鎌倉市出身。かながわ観光親善大使。5歳よりバレエを始め、1993年、ローザンヌ国際バレエコンクールでスカラシップ賞を受賞後、モナコに留学、首席で卒業。2004年東京バレエ団にプリンシパルとして入団して以来、世界のトップダンサーとして踊り続ける。
モーリス・ベジャールに『ボレロ』の指導を直接受けた最後のダンサーであり、『ボレロ』を踊ることを許された世界でも数少ない女性ダンサーの一人。令和5年秋、紫綬褒章を受章。

―バレエダンサーが身体を通して「声」を発する際、どのような感覚がありますか？

作品にもよりますが、ドラマティックなバレエ、例えば『ジゼル』（音楽：アダン）を踊る場合、ジゼルの人生そのものを生きています。人物関係や物語の背景がはっきりした作品なので、舞台の上で「生きて踊っている」という感覚があります。狂乱する場面では、激情が本当に「声」として伝わるのではないでしょうか。いっぽう、ベジャールの『ボレロ』（音楽：ラヴェル）の主役メロディを踊る場合、何かを伝えるというよりも私自身が作品のなかに入り込むんですね。音楽そのものを視覚化して届けている感覚があります。

―『ボレロ』のメロディを2004年から国内外で幾度も踊られていますが「年齢や環境、世の中の状況がおのずと踊りに反映されてくる」そうですね。

私が『ボレロ』を踊ると、観客の皆さんが喜んでくださいます。私自身何が伝わっているのかわからないのですが、何かしらの「声」を届けているのかもしれません。言葉にならない声です。それを感じた方々が感動してくれます。コロナ禍で奇跡的に上演できたときは、私たちとお客さまが皆で同じ思いを共有しているという確信と特別感がありました。

―客席に身を差し出して踊り、エネルギーを交感しているということですか？

私は、自分が踊っていいんだ、踊るべきなんだと周りに気づかされながらバレエを続けてきました。つらくてもうやめたいと思うと「舞台を観て元気になった！」とお客さまが喜んでくださいます。皆さまからの「声」に生かされているから舞台で何かを捧げたいんです。「人の何かになれる」というのが、私の踊る意味、生きる意味、存在意義につながります。ただただ能動的に踊るのではなく、観てくださる方々から届く「声」を感じて踊っています。

―今後の展望をお聞かせください。

令和5年秋の褒章で紫綬褒章をいただいたこともあり、バレエに携わっていくことが使命だと感じるようになりました。今後ずっと現役で踊り続けていくことはないでしょうし、自分が何をできるのかは刻々と変わっていきますが、バレエの「声」を皆さんに届けられる存在でありたいと願います。私はずっと一流を追求してきたので、一流を目指す若いダンサーの手助けもしたいですね。本物の舞台をつくる存在になりたいです。

伝統芸能

取材・文：編集部

人形浄瑠璃文楽公演『義経千本桜』
写真：青木信二

日本には、成立した時代が異なる様々な芸能が共存し、現代まで受け継がれています。本誌では「伝統芸能」のなかでも、2008年に「歌舞伎」とともにユネスコの「人類の無形文化遺産」代表一覧表に登録された「人形浄瑠璃文楽」「能楽（能・狂言）」と、「民俗芸能」の視点を取り上げます。いずれも言葉や音楽を用いた表現が人々に親しまれ、現代へと受け継がれてきたものです。神奈川県立青少年センターが主催する「かながわ伝統芸能祭」と、横浜能楽堂での取り組みについて、お話を聞きました。

かながわ伝統芸能祭

神奈川県内の小中高生へ向け、芸術文化の「普及・啓発」を目的とした様々なプログラムを実施している「神奈川県立青少年センター（以下、青少年センター）」。主催事業の一つである「かながわ伝統芸能祭」について、舞台芸術プロデューサーの楫屋一之さんにお話を聞きました。

かながわ伝統芸能祭とは？

「青少年センター」は舞台芸術の公演だけでなく、中高生のための演劇・ダンスのワークショップや、不登校の子どもたちに向けたアウトリーチなど、幅広いプログラムに取り組んでいる施設です。前川國男建築としても知られ、紅葉ケ丘エリアの文化拠点の一つとして県民に親しまれてきました。

この場所で、約60年前からかたちを変えて続いているのが「かながわ伝統芸能祭」です。現在は①歌舞伎鑑賞教室、②人形浄瑠璃文楽、③こども歳時記という3つのプログラムを展開しています。

歌舞伎鑑賞教室と人形浄瑠璃文楽の公演は、大勢の観客を集める人気のプログラム。いずれも特徴は、上演の前に、出演者があらすじや見どころをわかりやすく説明する15分程度の解説が入ること。普及・啓発を目的とする青少年センターならではの取り組みです。2023年10月の人形浄瑠璃文楽の公演では開演前に、舞台に登場する人形と一緒に記念撮影できる時間も設けられ、うれしそうに撮影の列に並ぶ子どもたちの様子が印象に残りました。

人形浄瑠璃文楽の魅力

「太夫（たゆう）」と呼ばれる物語の語り手と、「三味線」の旋律、そして「人形遣い」が操る人形によって表現される「人形浄瑠璃」。なかでも文楽座の座員によって演じられ、3人の人形遣いが一つの人形を操る「人形浄瑠璃文楽」は、世界的にも高い芸術性が認められています。3人で一つの人形

相模人形芝居の5つの座のうちの一つ、「相模人形芝居下中座」

まれたわけではなく、生活の中から発生したものだった。それが人々に知られるようになり、かたちを変えて発展していったのではないでしょうか」と話してくれました。

歌舞伎や人形浄瑠璃文楽の公演には一定の観客がついているものの、その高齢化が課題になっていると楫屋さんは指摘します。「実は神奈川県は、もともと三人遣いの人形芝居が根づいていた地域で、『相模人形芝居』という独自の表現も残っています。こういった『民俗芸能』を〝伝統〟の枠から解き放ち、今に息づくものとして、子どもたちの世代へ伝えていくアプローチが必要だと私たちは考えています」。

遊びの中で出会う伝統文化――「かながわ伝統文化こども歳時記」

かながわ伝統芸能祭の中に、3年前から新たなプログラムとして再編されたのが「かながわ伝統文化こども歳時記（以下、こども歳時記）」です。今年度も2024年2月に、青少年センターで開催しました。「こども歳時記」では、神奈川県各地域の芸能の上演や、日本舞踊・講談のワークショップに加え、子どもたちが遊びながら伝統文化に触れるプログラムがあることが特徴です。郷土玩具の「片瀬こま」の体験や、年中行事のワークショップ。こういった地域に息づいてきた伝統文化に、子どもたちが楽しみながら出会える場となっています。

「こども歳時記」では毎年、神奈川における盆踊りのルーツの一つといわれる「相模のささら踊り」の紹介を行っています。さらにこのプログラムでは、振付家・ダンサーのスズキ拓朗さんによる新たな振付・演出による『SASARA』も発表。3回目となった今年度は、その集大成の年になりました。ささら踊りは、嫁入り前の女性の踊りで、郷土の誇りや生活の喜びが歌われます。こういった民俗芸能の中における歌や、日本の民謡における〝地域自慢〟のような歌詞は、どこかラップの表現に通じるものも感じます。

「片瀬こま」体験の様子

芸能を、生活の中に戻したい

地域に根づいてきた芸能は、その土地で上演することが、本来あるべき姿ではないかと楫屋さんは話します。

「芸能は、村落などの共同体が、それを維持していくための〝祭り〟のようなものとして発展した側面もあります。みんなが共有できる〝物語〟があることで、コミュニティーが守られていくわけです。そういう点でも、芸能は生活と一体のものでした。

それが近代以降、舞台芸術は観客を劇場に呼び込んで上演することが、一般的なかたちになりました。〝伝統〟という言葉がついていることで、保存しなければならないイメージのある芸能を、もっと今の生活の中に戻していかなければなりません。神奈川は民俗芸能の宝庫です。『こども歳時記』のように体験や遊びの中で、その魅力を子どもたちの世代に伝えていきたいですね」

スズキ拓朗さん振付・演出による『SASARA』

を動かすことで、人間の歩く・立つ・座るといった関節の細やかな動きを表現することができ、まるで人形が生きているかのように見えます。

歌舞伎は、今から400年以上前の江戸時代に、出雲の阿国という女性が始めた「かぶき踊り」が発祥といわれていますが、楫屋さんは人形浄瑠璃の起源について「諸説ありますが、今から1000年以上前にさかのぼる平安時代に、平家の落人が、手慰みのようにして人形をつくり動かしたことが始まりだともいわれています。つまり〝見世物〟として生

伝統芸能

横浜能楽堂

能『葵上』出雲康雅
写真：神田佳明

企画性の高い能楽（能・狂言）などの上演や、海外とのコラボレーション、また小中学生向けの狂言ワークショップなど、古典芸能を多角的に今に受け継いできた「横浜能楽堂」。能・狂言の魅力や音楽性について、プロデューサーの大瀧誠之さんにお話を聞きました。

日本の伝統的な〝ミュージカル〟と呼ばれる能

横浜能楽堂芸術監督の中村雅之さんは、著書*1で「能は、音楽（囃子）・歌（謡）、ダンス（舞）が一体となり物語が進行する、という点においては『日本の伝統的なミュージカル』と言っても良いかもしれない」と語っています。

また、音楽・歌・ダンスの要素以外にも、多彩な魅力が能にはあります。能の曲は、『源氏物語』などの古典文学や和歌、神道・仏教など様々な要素が取り込まれてつくられており、文芸作品としても味わい深いものとなっています。さらに、無表情のようでいて様々な感情を表す能面や、多彩な色や文様で表現された装束の華やかさもあり、能は視覚的にも秀でた古典芸能といえます。

そんな能が「ミュージカル」と称されるゆえんについて、大瀧さんにお聞きしました。「例えば歌舞伎にも長唄、義太夫といった歌の要素はありますが、基本的に役者は歌いません。一方で能は、役者の謡により場面の状況や心情が説明され、舞台進行に大きく関わってきます。そのため、ほかの芸能と比べても、よりミュージカル的と言えるのではないでしょうか」。

能・狂言はセットで上演されることが多く、この組み合わせは「番組」と呼ばれています。また能も狂言も演目を数えるときの単位が「曲」である点にも、音楽性が感じられます。

内容の〝理解〟ではなく、舞台を楽しんでほしい

大規模改修（天井の耐震化など）に伴い、2024年1月から2年半の休館に入った横浜能楽堂。2023年度は、開館から27年間の〝総集編〟として、「中締め」特別公演を5回シリーズで上演しました。なかでも11月26日の「お水取りの能」は、照明を落とし、蝋燭の灯りによる上演や、東大寺の声明を2階から響かせるなど、芸術的な演出で観客を魅了。大瀧さんは、曲の世界観をよりリアルに感じて楽しんでいただけたと話します。

「お客さまの声として、台本を知りたいという方も一定数いらっしゃいます。横浜能楽堂では、以前はパンフレットに台本をすべて載せていましたが、そうするとどうしても言葉を追ってしまい舞台を見てもらえません。もちろん謡の内容がわかれば理解は深まります。でも、お囃子の音の迫力や、謡の繊細な響き、舞や能面といった視覚的な要素など、内容がすべてわからなくても楽しめるポイントはたくさんあります。まずは難しいことは考えずに舞台を見てもらい、興味をもっていただいたら、より深く内容を調べていただければうれしいですね」

「中締め」特別公演
第4回「お水取りの能」にて、
能『青衣女人』香川靖嗣
写真：尾形美砂子

*1 『これで眠くならない！ 能の名曲60選』（誠文堂新光社、2017年）、p.6「能とは何か」
*2 「OTABISHO」とは漢字で「御旅所」と書き、祭礼で神社から神様が巡行した際に仮に鎮座される場所を表す

「OTABISHO*2横浜能楽堂」ランドマークプラザにオープン！ 2024年4月より

横浜能楽堂は大規模改修中の新たな試みとして、能・狂言を紹介するスペースをオープンします。能面や装束、楽器などの展示や、講座・ワークショップの開催など、能・狂言を身近に感じてもらうプログラムを展開していきます。観客層の高齢化もあり、休館中でもより若い世代に魅力を伝えていきたいという思いから、全国的にも珍しい商業施設内の“能・狂言の普及スペース”が誕生しました。ランドマークプラザにお越しの際には、ぜひお立ち寄りください。

OTABISHO 横浜能楽堂のイメージ図

COLUMN

人生肺魚訓

杉山洋一 すぎやま・よういち
（作曲家・指揮者）

東京生まれ、ミラノ在住。国内外で様々な舞台や演奏会の企画に携わる。一柳慧コンテンポラリー賞ほか、数々の受賞歴を持ち、2023年度は齋藤秀雄メモリアル基金賞（指揮部門）に加え、指揮および作曲活動の成果により芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。2024年10月に県民ホールで上演される『ローエングリン』（シャリーノ作曲）では指揮を務める。

＊1　肺のような器官をもち、空気呼吸ができる魚。古生代中期から中生代にかけて栄えた

皆さんは、生きた化石と呼ばれる肺魚＊1が甲高くキュウと鳴いたり、クゥンとくぐもったユーモラスな声を出したり、ハアとため息までつくのをご存じですか。この鳴き声こそが4億年前に生まれた私たちの声の起源と言われます。実際に聴くとごく普通に可愛らしい小動物の鳴き声のようで驚かれるかもしれません。肺魚がどこまで意識的に声を発しているのか分かりませんが、ともかく私たちの祖先は、水中から陸に生活の拠点を移すにあたって、こんな素敵な声を獲得したのです。

きっと当初は驚きや喜び、悲しみを、感情のおもむくまま声にしていたでしょうけれども、やがてそれは他者に自らの気持ちを伝える役目を担うようになりました。その後、仲間どうしで狙う獲物を特定したり、忍び寄る猛獣を知らせるため、動物の仕草や声色を真似するなりして、より複雑な情報を正確に伝えようとしたに違いありません。一人が遠吠えの真似をしている最中、偶然他の誰かが別の狼の遠吠えを真似すれば、そこで思いがけずハーモニーが生まれたはずです。互いの身体が共鳴するのに驚いたかもしれませんし、複数の声が併さると、そこに神的能力が宿ると信じてみたり、トランス状態をもたらす、音やリズムに対して畏怖や恐怖すら覚えたとしても、当時の状況を鑑みれば当然ではないでしょうか。

体格が現在の私たちへ近づくにつれ声帯や知能も発達し、音の高低や長短を意識的に使い分けられるようになって、当初原始的コミュニケーション手段に過ぎなかった声は、より入り組んで洗練された情報を正しく簡便に伝える「単語」を発明して、それらを整理し系統化して「言語」を作りあげました。一方、自らの精神バランスを保つ必要から、単語や言語で表現できない身体の芯に宿る精神、「心」や「感情」を他者と共有する手段として、言葉から切り離された「うた（音楽）」が生まれたのかもしれません。「言葉」と「うた」の間に存在する「詩」や「演劇」、「舞踏」が、現在まで続いているのは、私たちに不可欠な存在の証しです。

肺魚やシーラカンスのような肉鰭（にくき）類から両生類が生まれ、いつしか爬虫類と哺乳類に進化して私たち人間が生まれたように、声は、当初から情報伝達と感情表出の両面を合わせ持っていたかも知れません。「うた」が原始的な声の多面性を受け継ぎつつ、「音楽」が「うた」を他の発音体で模倣する形で誕生し、「うた」の持つ「感情を宿す力」も「音楽」にそのまま受け継がれました。私たちは「うた」を歌えば嬉しくも悲しくもなれるし、ヴァイオリンやピアノを弾いて、嬉しさや悲しさも表現できます。「言葉」のような直接的限定的な表現ではないので、曖昧で齟齬も生じるかもしれませんが、その昔私たちの祖先が行っていたコミュニケーションに近いかもしれません。

ヨーロッパでいえば、ルネッサンス期イタリアで誕生したオペラが一世を風靡したのは、登場人物の感情の起伏を際立たせた「うた」が、聴衆の琴線に直接訴えかけたからでしょう。

オペラのアリアを模して、ヴァイオリンやチェロなど弦楽器は旋律を歌うことをおぼえ、オーボエなど管楽器は、より自由に旋律を演奏可能に改良され、音量が一定だったチェンバロは、より肉声に近く音量も増減可能なピアノへ変化してゆきます。19世紀中期、ヨーロッパのある高名なピアノ奏者は、「魅力的な演奏を目指すなら、足繁く劇場に足を運んで素晴らしい歌手をつぶさに観察するのが一番」と書き残したほどです。

現在の日本に目を転じると、お話ししてきた声の歴史を過去にタイムスリップさせたような、今より五感がずっと鋭敏だった人間の超越的な能力を彷彿とさせるような、類まれな声のアーチストで山崎阿弥（やまざきあみ）さんという方の存在が光ります。およそ人間が発しているとは思いもかけない、神秘的でまるで動物のような、不思議な声を自在に使って山崎さんはパフォーマンスをします。その彼女のレッスンを見学したとき、先ず一切の先入観を消去してから、私たち本来の空間把握能力と知覚能力を覚醒させつつ、部屋の壁を手でていねいになぞり、空間全体を自らの身体へ移し替え、落とし込む作業から始まったのが印象的でした。

今年10月には橋本愛さんを迎えて神奈川県民ホールでシャリーノ作曲のモノオペラ『ローエングリン』を上演するのですが、橋本さんの役どころは、神秘的で、現代とも古代とも、人間とも動物とも判然としない、理性と本能、時には野性すら入り雑じる声を使いわける主人公エルザ役で、時にはシャーマニスティックとも感じられるほどの、シャリーノの圧倒的な声の世界観を山崎さんと研究してくださっています。『ローエングリン』を通して、どのような「声」「うた」「音楽」「世界」が溢れてくるのでしょうか。それを一番楽しみにしているのは、何を隠そう私自身です。

神奈川県民ホール
開館50周年記念
オペラシリーズ Vol.2

サルヴァトーレ・シャリーノ
作曲
『ローエングリン』

指揮：杉山洋一
演出：吉開菜央・山崎阿弥
2024年10月5日（土）、6日（日）
会場：神奈川県民ホール　大ホール

映像メディアを用いて制作するアーティスト、本屋を拠点としたアートコレクティヴの主宰、そして言語表現では中原中也賞の受賞と、多才な活躍をみせる青柳菜摘さん。映像作品でのご自身の声による語りや、詩作を中心に、創作へのモチベーションについてお話を聞きました。

詩は言葉で世界をあらわす イメージを組み立て表現していく

アーティスト／コ本やhonkbooks主宰

青柳菜摘 Natsumi Aoyagi

PROFILE

1990年、東京都生まれ。
リサーチやフィールドワークを重ねながら、
観察、記録、物語をめぐる作者自身の経験を表現することをめざして、
その不可能性を記録メディアでいかに表現するかを主題に取り組んでいる。
2016年、東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。
「だつぉ」というアーティスト名でも活動。

――青柳さんの作品の多くに、ご自身が語っている印象が強くあります。

初めての映像作品『孵化日記』（2011年）からです。それまでは絵をネットで発表していましたが、震災を機に状況が一変して、自分は何がつくれるのかと悩み、映像を撮ることならできると考えました。目に見えない放射性物質の影響を強く受ける自然、なかでも虫に興味を抱き、撮影のために山に入りました。ですが、どこにいるかがわからない。自分と自然との距離があまりに遠いことに気づかされました。しかし映像にはそれが映りません。そこで映像に声をのせることで、カメラに映らなかった自分自身の時間を重ねることにしました。

――過去作では、都市に残る富士塚や、中国の媽祖（まそ）に着目されていますね。

見えないことをどう捉えられるか考えながら、かたちにしていくことに関心があります。中国の女神・媽祖をきっかけに制作した展覧会「亡船記」（2022年）は、移動が依然ままならなかったコロナ禍に構想し、媽祖を通して航海の歴史を現代に問いました。

作品をつくるときは、まず自分が「わからない」と感じる現在の問題について考えます。今の時代に生きる自分が、今をどうやって考えられるのか、作品制作を通して考えたいという使命感みたいなものがありますね。

――映像メディアを用いた表現の言葉と、詩作にはどのような違いがありますか？

映像では声として発した言葉とイメージを合わせて組み立てますが、詩は言葉があって世界をあらわしていきます。言葉がならび、イメージをつくっていくので詩を読むのはとても難しいです。

中原中也賞を受賞した詩集『そだつのをやめる』（2022年）は、以前書いた小説から映像を編集し直すようにつくりました。映像でも詩でも、言葉とイメージの関係性を楽しんで制作しています。

青柳さんの個展「亡船記」（主催：十和田市現代美術館）より《方船》（会場：田島生花店）。十和田市内の美術館や温泉、バー、スナックなどで7つの作品を展示しました
写真：小山田邦哉

取材・文：編集部　写真：加藤 甫

ラッパーとして表現を常に更新するように創作に向き合い、
音楽ジャンルにとどまらないフィールドで活躍する環ROYさん。
ダンサーとの共演や演劇の舞台でも、傑出した存在感で注目を集めています。
現在の創作における関心について、お話を聞きました。

環 ROY Tamaki Roy

ラッパー

現在の関心は〝曲想〟を意識すること

PROFILE

1981年、宮城県生まれ。
主にラップを用いた音楽作品の制作を行う。
これまでに6枚の音楽アルバムを発表、国内外の様々な音楽祭に出演。
そのほか、パフォーマンスやインスタレーション、劇伴音楽、広告音楽、絵本などを制作。
ミュージックビデオ「ことの次第」が第21回文化庁メディア芸術祭にて審査委員会推薦作品へ入選。

――アルバム『Anyways』から3年ほど経ちました。現在はどんな状況ですか？

疫病以降、自宅をスタジオ化して録音までできるので、日常的に音楽をつくっている状態です。これまで他者に依頼していたバックトラックを、2020年以降、自分でつくるようになりました。結果、言葉からサウンドへ比重が移っていると感じます。言葉に対する姿勢が変化しているのは、ライフステージとの関係が深いように思います。子どもが生まれたり、親が死んだりする年齢ですので。

――環さんはラップのリリックで、どんなことを言葉にしようとされていますか？

『なぎ』（2017年）という作品までは、コンセプトやメッセージが他者に伝わること、共感してもらうことに関心を寄せていました。『Anyways』以降、それがかなり薄れてきています。現在の創作における関心は、自分の内側にあるものを他者に理解してもらおうと整理をしていくような行為にはなくて。〝曲想〟ってあるじゃないですか。曲のムード。自分がいいと思える曲想をつくる、見つける、みたいなことに関心があります。ファッションとか、抽象画に対する消費の仕方のような解釈が近いかもしれません。言葉の扱い方もこれまでとかなり変わってきていると感じます。

――声について考えることはありますか？

あんまりないですね。人それぞれっすよね、くらい。声って、顔と同じで身体の一部だから社会的なものですよね。社会は人間同士のコミュニケーションなので、人間の耳は「人の声」という音に対して、フォーカスが合うようにできているよな、とかは考えたことがあります。ボーカルがあるとそれが主と感じやすい理由というか。

――ご自身の身体性についてはどう考えていますか？

あまり意識したことがなくて。2010年代ぐらいからの人たちは実感がないかもしれないけど、ラッパーは言葉が面白くてラップがうまいのはもちろんだけど、「動きがかっこいいやつが偉い」っていう評価軸がもっとずっと強かった。テクノロジーが今より発展してないから身体性が重視されていたのかも。そういう少し昔のヒップホップに薫陶（くんとう）を受け参入しているので、ただそこからの影響って感じです。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『掃除機』（2023年）にて音楽制作、ヒデ役として出演
写真：加藤 甫

取材・文：編集部　写真：後藤武浩

TOPIC

茅ヶ崎FM

取材・文：編集部

海や里山といった自然環境と、商業施設などの都市機能がバランスよく共存し、約24万人が暮らす茅ヶ崎市。2023年10月、この街に初のコミュニティFM「茅ヶ崎FM（通称：エボラジ）」が開局しました。スタジオは、茅ヶ崎市役所と広場に隣接したガラス張りの平屋です。道行く人たちが、ラジオブースから流れる音に耳を傾け、生放送の様子を眺めることができる好立地。茅ヶ崎FMのメインDJ・宮治淳一さんと、スタッフの池原正洋さんにお話を伺いました。

広場から見える茅ヶ崎FMのスタジオ

「海と音楽のまち」として知られる茅ヶ崎ですが、藤沢や平塚などほかのエリアと比べると、実はコミュニティFM局がなかなか開局されなかった地でもあります。茅ヶ崎FMの発起人であるDJの宮治さんは「いつかできるだろうと思っていたんです。でも日本で初めてコミュニティFMが開局して四半世紀以上経っても、茅ヶ崎にはできなかった。この街には音楽家がたくさんいます。その音楽を伝えられる最高のメディアがラジオだとしたら、コミュニティFM局がないのは寂しい。いろいろな人に声をかけ、自分なりに可能性を探っていくなかで、地域貢献施設を建設予定だったこの場所とめぐり合ったんです」と振り返ります。

スタジオ内の様子

茅ヶ崎で暮らす人たちに向け、どんな情報をどのように届けていくか。立地上、津波など災害に対する意識も高い茅ヶ崎で、FM局としても災害時の情報発信には特に力を入れています。県立茅ヶ崎支援学校が実施した、障がいのある子どもたちが、災害時に体育館に宿泊することを想定した避難訓練を、生中継したこともありました。「実際に重度の障がいのある人が身近に住んでいたときに災害が起きたらどうするのか。知っておくことが、行動につながります」とスタッフの池原さんは話します。

また、もう一つ大切にしているのが「子どもたちの未来」です。茅ヶ崎FMのスタジオ横には、誰でも気軽に来られるカフェが併設されています。「ラジオを放送している様子を実際に見ると、あそこにあるんだという実感がもてる。そして、家でも聴いてみようとつながればうれしいですね」と池原さん。また今後は、サーファーの桑浩平さんの番組と連携し、パドリングのレッスンを広場の芝生で開講したり、隣接カフェでミニライブや公開収録を実施したりといった、リスナーと直接交流がもてるイベントも企画しているそうです。

隣接のカフェ。災害時には避難所としても使えるようになっています

宮治さんは「市民のためのFM局として、広場のように開いておきたい」と話します。「番組にも、一般市民の方がたくさんゲストで出てくれているんですよ。そうすると、これは自分たちのFMなんだと思ってもらえて、聴く習慣ができる。いざ災害が起こったときにも、すぐにダイヤルを合わせてもらえる。それがコミュニティFMの使命であり、緊急時にきめ細かい情報が届くことにもつながります」。

ラジオは、映像が伴わないからこそ、「人間の声」で話す言葉がもつパワーが、ダイレクトに伝わるメディアでもあります。皆さんの地元にもコミュニティFMがあれば、ぜひ聴いてみてください。

その場で投稿できる曲のリクエストシート

「声の魅力ってあるんです」と語る、茅ヶ崎FMのDJ宮治淳一さん

REGULAR FEATURE

本誌では、毎号以下のコンテンツをお届けします。

アートシーンプレイバック

県内のホールや劇場に、活気が戻ってきているのを感じる昨今。
秋にかけて充実した演目が見られた「音楽プログラム」と、
夏の始まりを合図に多くの文化施設で開催された「キッズプログラム」から、
県内の2023年下半期のアートシーンをふりかえります。

●

つなぐ ―社会と芸術

あらゆる人たちが芸術文化に親しむことができるよう、
神奈川県内の文化施設や団体では様々な取り組みを行っています。
インクルーシブなアプローチを中心に、社会と芸術をつなぐ事例をご紹介します。

●

公演の舞台裏

普段は縁の下の力持ちとして様々なかたちで公演を支え、
「舞台裏」で活躍するスタッフの技術やその仕事について取り上げます。
今回は［ヘアメイク編］をお届けします。

2023年下半期の音楽プログラムをふりかえる

未曾有のパンデミックも収束へと向かいつつあった2023年の下半期。神奈川県内のホールでは、オーケストラや室内楽、オペラなど、国内外の名演奏家たちによる多彩なプログラムが展開され、コロナ禍前のような盛り上がりを取り戻しました。

文：八木宏之（音楽評論）

9月20日に音楽堂で開催された『庄司紗矢香 音楽とことば 未来への回帰』は、音楽、文学、演劇がオペラやミュージカルとはまた違ったかたちで共存した公演でした。世界のひのき舞台で活躍するヴァイオリニストの庄司紗矢香が、日本演劇界の鬼才、平田オリザと待望のコラボレーションを実現させ、ショーソンの《コンセール》の楽章間に平田による演劇が挟まれるユニークな舞台が披露されました。ショーソンの官能的で色彩豊かな響きと、日本の地方都市に生まれた人々の心のスケッチという、一見混じり合わないもの同士が互いを引き立て合い、まったく新しいコンサート体験を与えてくれました。

長い歴史と伝統を誇る日本フィルハーモニー交響楽団の横浜定期演奏会は、2023年で50周年を迎えました。古今東西の名曲を味わえるバラエティー豊かなプログラムや、音楽評論家によるわかりやすいプレトークなど、誰もが親しみやすい内容で長年愛されてきた日本フィルの横浜定期。10月21日に横浜みなとみらいホールで開催された公演では、日本フィルの首席指揮者に就任したばかりのカーチュン・ウォンが指揮台に立ち、ブラームスの交響曲第1番のエネルギッシュな熱演を聴かせてくれました。プログラムの前半には、今最も注目を集める若手ピアニストの一人である亀井聖矢が登場し、ショパンのピアノ協奏曲第1番の繊

MUSIC

写真：ヒダキトモコ

写真：山口 敦

シリーズ「新しい視点」
『庄司紗矢香 音楽とことば 未来への回帰』

瀧口修造の詩の朗読に始まり、武満徹、ドビュッシー、ヴェルディと続いた演奏会前半も、ことばの余韻から音楽が生み出される美しい時間となりました。ピアニストのベンジャミン・グローヴナーの繊細なタッチはドビュッシーやショーソンのようなフランス音楽にふさわしいもの。ヴェルディの弦楽四重奏曲で圧巻の演奏を聴かせたモディリアーニ弦楽四重奏団の凝縮されたアンサンブルは、後半のショーソンでは音楽を支える柱となりました。

会場｜神奈川県立音楽堂
日程｜2023年9月20日
主催｜神奈川県立音楽堂

細で抒情的な演奏で聴衆を魅了しました。

国際音楽都市神奈川には、海外からもオーケストラが次々とやって来ます。そうしたオーケストラの来日公演もコロナ禍では途絶えていましたが、2023年はウィーン・フィルハーモニー管弦楽団やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団をはじめとする世界の名門オーケストラが県内のホールで演奏会を行いました。11月4日に横浜みなとみらいホールで開催されたセミヨン・ビシュコフとチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会では、チェコ・フィルの十八番であるドヴォルザークの交響曲が披露されました。2018年からオーケストラを率いるビシュコフは、情熱的な指揮で知られる巨匠ですが、濃密なサウンドを誇るチェコ・フィルとの相性は抜群で、ボヘミアの風景が目の前に浮かび上がるような立体的な演奏を実現していました。

2025年に開館50周年を迎える県民ホールは、その節目を祝うオペラシリーズを継続しています。大きな反響を巻き起こした『浜辺のアインシュタイン』に続き、2024年10月にはイタリアの作曲家、サルヴァトーレ・シャリーノのオペラ『ローエングリン』が上演されます。シャリーノとはいったいどんな作曲家で、『ローエングリン』とはいったいどんな作品なのか。そうした疑問に答えるプレイベント「シャリーノ祭り」が11月18日に県民ホールで開催されました。イベントは「祭り」の言葉どおり盛りだくさんの内容で、『ローエングリン』の指揮者、杉山洋一と演出家の吉開菜央を招いたトークや、イタリア、ウンブリア州にシャリーノを訪ねるドキュメンタリーの上映のほか、ヴァイオリニストの石上真由子、フルート奏者の山本英、打楽器奏者の安藤巴によるシャリーノ作品の演奏など、1年後の『ローエングリン』上演へ、大いに期待を高めるものとなりました。

写真：松尾淳一郎

セミヨン・ビシュコフ チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

セミヨン・ビシュコフとチェコ・フィルが横浜公演のために選んだのは、ドヴォルザークの交響曲第8番、第9番《新世界より》という交響曲2曲の重厚なプログラム。チェコ・フィルの名手たちが奏でるドヴォルザークの慈愛に満ちた旋律の数々は、私たちに東欧のオーケストラを聴く喜びを教えてくれました。アンコールにはドヴォルザークの《スラヴ舞曲》第2集第2番とブラームスの《ハンガリー舞曲》第1番も演奏され、横浜みなとみらいホールはスラヴの熱狂に包まれました。

会場｜横浜みなとみらいホール
日程｜2023年11月4日
主催｜ジャパン・アーツ

舞台芸術講座　神奈川県民ホール開館50周年 記念オペラシリーズ vol.2『ローエングリン』関連企画 「シャリーノ祭り」

戦後のイタリアを代表する作曲家、サルヴァトーレ・シャリーノを徹底的に掘り下げるこのイベントのハイライトは、なんといっても若手音楽家たちによるシャリーノ作品の演奏でした。とりわけイベントの最後を飾った石上真由子による《6つのカプリチオ》は圧巻の名演で、たった一挺のヴァイオリンから満天の星のような広がりを生み出すシャリーノの魔法に、会場の誰もが心を震わせました。シャリーノの魅力と真価を音楽ファンに知ってもらうというイベントの目的は果たされたといえるでしょう。

会場｜神奈川県民ホール 小ホール
日程｜2023年11月18日
主催｜神奈川県民ホール

日本フィルハーモニー交響楽団 第391回横浜定期演奏会

この日の演奏会に貫かれていたのは青春の息吹。亀井聖矢の紡ぐショパンはみずみずしさにあふれ、フレッシュな躍動感が強く印象に残りました。ブラームスの交響曲第1番は、ブラームスが20年以上もの歳月を費やして書き上げた力作ですが、カーチュン・ウォンはオーケストラから適度にリラックスした響きを引き出し、音楽の自然な流れのなかで、若いエネルギーに満ちたブラームスの肖像を鮮やかに描きだしました。

会場｜横浜みなとみらいホール
日程｜2023年10月21日
主催｜日本フィルハーモニー交響楽団

2023年下半期のキッズプログラムをふりかえる

2023年も夏休みの始まりを合図に、神奈川県内の多くの文化施設で、子どもとその家族を対象とする数々のキッズプログラムが開催されました。2023年下半期に開催されたイベントからいくつかをふりかえります。

文：住吉智恵（アートプロデューサー／RealTokyo ディレクター）

KAAT キッズ・プログラム2023『くるみ割り人形外伝』

内気で自信をもてない少女が、相棒のうさぎのぬいぐるみと共に繰り広げる一夜の冒険を描く本作は、作・演出を根本宗子、音楽・演奏を姉妹デュオ、チャラン・ポ・ランタンの小春が手がけました。同性カップルの二人のパパなど今日的問題をサラリと盛り込み、誰もが個々のアイデンティティーに誇りをもつべきであることを時に切実に訴える物語は、子どもはもちろん、生きづらさを感じている人すべてに刺さったでしょう。

会場｜KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ
日程｜2023年8月5日～13日
主催｜KAAT 神奈川芸術劇場

写真：Masayo

写真：宮川舞子

KAAT キッズ・プログラム2023『さいごの1つ前』

作・演出を松井周、主人公を白石加代子が務める本作は、天国と地獄の分かれ道で居合わせた人たちが、天国行きの条件である「最高の思い出」を求めて失いかけた記憶を探るお話。それぞれの生き地獄で奮闘してきた事情が語られ、あの世とこの世が接続する世界が立ち現れます。芸術は生者と死者の境界を混淆（こんこう）させ、対話の糸口さえ生み出します。事前ワークショップで子どもたちが創作した“すてきな地獄”の発想には無敵の自由がありました。

会場｜KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ
日程｜2023年7月21日～24日
（新型コロナの影響で7月23日～24日は中止）
他5劇場にて上演（8月26日まで）
主催｜KAAT 神奈川芸術劇場

2023年の夏、横浜にある神奈川県立の3館（KAAT、県民ホール、音楽堂）では同時期にキッズプログラムが開催されました。

KAATキッズ・プログラム2023のスタートを飾ったのは、欧州を拠点に活躍するダンサー・振付家 伊藤郁女（かおり）による新作ダンス作品『さかさまの世界』。伊藤は出演者と共に劇場近隣の幼稚園と幼保園を訪れ、自作の紙芝居をもとに集めた子どもたちの「ひみつ」を作品に織り込みます。子どもの想像力が世界を逆さまに変え、傷ついた世界を金継ぎのような輝きに変えるのではないか、と伊藤は本作の創作意図を語っています。

KAATではこのほか、演劇、音楽、ダンス、歌舞伎の楽しさを一度に味わえるミュージカル『くるみ割り人形外伝』、演劇界の重鎮・白石加代子が主演を務めた演劇作品『さいごの1つ前』の2作品が上演されました。

県民ホールでは2023年も8月にオープンシアターが開催されました。ホールでは午前中、オルガンとピアノの違いを体感するコンサートとトーク「くらべてみよう！オルガンとピアノのちがい2」を開催。午後は、「くるみ割り人形」の原作童話を舞台化したダンス劇『マリーの夢』

KAATキッズ・プログラム2023
『さかさまの世界』

国際的に高く評価され、自身も子育て中の伊藤郁女が手がけた本作は、この苛烈な世界と疲弊した大人たちを救ってくれるのは子どもの想像力ではないか、という祈りから生まれました。子どもたちが打ち明けた“ひみつ”と出演者たちのアイデアを織り込みながら紡がれたのは、筋書きのないカオティックで魔術的な世界観の芽吹き。客席に向かって開かれた4人の身体を通して、伊藤の発するポジティブな刺激を脳より身体で受けとめる舞台でした。

会場｜KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ
日程｜2023年7月1日〜9日
主催｜KAAT神奈川芸術劇場

子どものための音楽堂
「せかいはともだち!」

日本と関わりの深い各国の音楽に親しむイベント。鮮烈な爆音とうねる中国獅子。しなやかに舞う韓国伝統打楽器チャング奏者。楽園感あふれるブラジルのサンバダンサー。ホワイエでは自国の文化を語る「いろいろなくにの はなし」に耳を傾ける観客の関心の高さに驚きました。「せかいはともだち!」と銘打ったこのイベントが定番となり、異なるルーツをもつ人々が隣人として尊敬し合うマインドセットが世界に広がることを希求します。

会場｜神奈川県立音楽堂
日程｜2023年7月29日
主催｜神奈川県立音楽堂

写真：ヒダキトモコ

写真：金子愛帆

が上演されました。開演前には舞台で使われるキャンディーを作るコーナーがロビーに設けられ、事前に公募された子の名前が劇中で呼ばれたり、終演後のステージで出演者と踊ったりと豊富な参加プログラムが用意されました。またロビーでは造形ワークショップが開かれ、子どもたちがつくった色とりどりの「窓」がガラス面に飾られました。

音楽堂では7月に、子どものための音楽堂「せかいはともだち!」と題するイベントが開催されました。日本語・中国語・韓国語・英語・ポルトガル語で書かれたチラシに誘われ、様々なルーツをもつ観客たちが集まり、各国の多様な音楽を通して異なる文化に触れる一日を過ごしました。

「せかいはともだち!」と同じ日、お隣の横浜能楽堂では「伝統文化一日体験オープンデー」が開催されました。子どものみを対象にしたイベントではありませんが、能楽に興味はあるけれどまだ観たことがない人にとって、謡(うたい)や仕舞(しまい)の鑑賞ガイドや和楽器のワークショップ、舞台裏見学などのプログラムを通じて能楽の魅力を知る貴重な機会となりました。太鼓演奏を初めて体験する子どもたちの真剣なまなざしが印象的でした。

また横浜市民ギャラリーでは、1965年から続く展覧会「横浜市こどもの美術展2023」が7月に開催されました。市内の12歳以下の子どもたちから絵画作品を募集し、今年のテーマ「夏」部門、「自由テーマ」部門、合わせて1,386点が集まりました。併せて地下展示室で開催された、「こどものためのコレクション展『いろのいろいろ』」では、「色」をめぐる多角的な視点から所蔵作品を紹介しました。近年注目される対話型鑑賞に親しむきっかけとなる好企画です。

いずれのプログラムも丁寧に練り込まれ、形式や知識より先に、体験的に創作の現場に参加することを重視した内容で、子どもたちの直感力を信じていることが伝わりました。「体験」する機会の格差が問題視される今、手の届きやすい芸術鑑賞が、子どもにとって熱中できることを発見する機会の創出につながることに期待します。

写真：飯野高拓

オープンシアター2023
ダンス劇「マリーの夢」

作・演出・振付を熊谷拓明、演出補を中村蓉が務めた本作は、チャイコフスキーのバレエ「くるみ割り人形」の原作で、子どもにはちょっと怖いダークな幻想の物語を舞台化したスタイリッシュでテンポの良いダンス劇。バレエでは様式の陰で不可視化されている寓意性が、本作ではおしゃれな舞台の周辺にふわりと焚きしめられました。勘のいいオマセな子どもなら、不格好なクルミワリの勝利に込められた意味を感じとったかもしれません。

会場｜神奈川県民ホール
日程｜2023年8月19日
主催｜神奈川県民ホール

つなぐ
― 社会と芸術

取材・文：編集部

みんなのスマイル・コンサート

会場｜茅ヶ崎市民文化会館 大ホール
日程｜2023年9月12日
主催｜神奈川県

組曲《カルメン》の〈トレアドール〉に合わせて体を前後に揺すったり、《ラデツキー行進曲》に合わせて行進したり……。この日、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の生演奏を特別支援学校の子どもたちが体いっぱいに楽しんだ「みんなのスマイル・コンサート」が、茅ヶ崎市民文化会館で開催されました。

会場は多目的トイレの個数が多く、休憩室や親子室も完備。オーケストラピットは車椅子用の特別席に変わっていました。その席に向かうスロープは会館スタッフのお手製です。演奏中も客席の出入りは自由。歩いたり、声を出したりすることもOK。看護師が常駐するなど、安心できるサポートも手配されました。

鑑賞するだけでなく、ボディーパーカッションや合唱など参加型のプログラムも。なじみのある曲を中心に、学校でのいつもの過ごし方に配慮した、短時間のプログラム構成でした。企画担当者は「音楽に触れることが、個々の世界が広がるきっかけの一つになれば」と話します。

平塚支援学校に通う高校3年生の相川七海（ななみ）さんも、オーケストラの迫力と、合唱や手拍子を楽しんだそうです。「エレクトーンやピアノを習っているので、レッスンで弾いたことのある《ラデツキー行進曲》にものすごく感動しました。合唱曲《ビリーブ》も、知っている曲だから聴いていて気持ちがよかったし、楽しく歌えました」。音楽を鑑賞するのは「元気をくれる癒やし」だと相川さんは言い、今後はダンスも観てみたいと期待を語ります。

学校では、バスの手配、当日の動きの確認、医療的ケアの人員確保など様々な準備をしたそうです。また事前学習では、実際にヴァイオリンやチェロに触れてみたり、楽器に関するクイズをしたりしました。

担任の國武理佳先生も、コンサートを前向きに振り返りました。「障がいがある児童生徒にとって難しいのは長い時間静かに聴いていること。ホールでの本格的な演奏を、声を出したり、体を動かしたりしながら楽しめたので、すごくよい経験でした。鑑賞後も自分で曲について調べるなど、余暇の楽しみや学びにつながると思います。これからも継続して開催されることを期待しています」。

相川七海さん（左）と國武理佳先生（右）　写真：大野隆介

みんなのスマイル・コンサートのためにつくられた車椅子用スロープ

● 共生共創事業とは？ ●

「ともに生きる ともに創る」を目標に、年齢や障がいなどにかかわらず、すべての人が舞台芸術に参加し楽しめる企画を実施することで、文化芸術の分野から「ともに生きる社会かながわ」の実現に寄与しています。2023年度は県立障害者支援施設「津久井やまゆり園」の利用者が影絵専門劇団「劇団かかし座」と影絵創作に挑戦する企画のほか、障害者サポート事業所での打楽器ワークショップや、多文化共生企画、シニア劇団やシニアダンスの企画など多数実施しました。

● みんなのスマイル・コンサート ●

神奈川フィルハーモニー管弦楽団演奏による、特別支援学校対象のコンサート。共生共創事業として神奈川県の主催で実施し、今後も県内の様々な地域で開催予定。2023年度は、会場周辺の5校の特別支援学校に通う児童生徒がクラシックの名曲に合わせて合唱や手拍子を楽しみました。

公演の舞台裏

ヘアメイク編

聞き手・文：編集部　写真：大野隆介（＊を除く）

※本インタビューのロングバージョンはWEBに掲載しています。

ウィッグを使うときのこだわりについて話す谷口さん（左）、『さいごの1つ前』で実際に使用したウィッグ（中央）、KAATキッズ・プログラム2023『さいごの1つ前』舞台風景　＊写真：宮川舞子（右）

ヘア＆メイクアップアーティスト

谷口ユリエ

［たにぐち・ゆりえ］ヘア＆メイクアップアーティスト。武蔵野美術大学卒業後、専門学校等を経て美容師免許取得。マロンブランド太田年哉・稲垣亮弌に師事し、独立後フリーランスとして広告、雑誌、舞台、化粧品監修、ウィッグ製作など多方面で活躍中。

「舞台裏」で公演を支えるスタッフたちの「技術」をお伝えする本コーナー。今回は、KAATキッズ・プログラム『さいごの1つ前』（2022年、2023年）でヘアメイクを手がけられた谷口ユリエさんにご登場いただきます。舞台のヘアメイクの面白さについてお話を聞きました。

――ヘアメイクの世界に入られたきっかけを教えてください。

絵を描くことや工作など、ものづくりが好きでした。大学も美術大学に進学したのですが、その後、興味があった「美容」と「ものづくり」をつなげて、ヘアメイクを目指しました。最初はフォトスタジオのアルバイトから。後に出会った師匠の一人が、舞台も手がけていて。初めて舞台の本番スタッフとして入ったのは、長塚圭史さんが演出された『マクベス』（2013年、シアターコクーン）でした。

――その後、様々な舞台作品に関わられていらっしゃいます。

みんなで一緒につくる雰囲気が好きなんです。『マクベス』ではものづくりの楽しさを久しぶりに思い出して。

転機は、長塚さんが出演していた作品に本番スタッフで入った時。現場の私がプランナーのメイクプランを「こうしたほうがよいんじゃないか」と思って変えようとしてしまったことがありました。本来、デザインを変えるのはご法度ですが、それを長塚さんが面白がってくださったのか、数年後にKAATでの演出作品『作者を探す六人の登場人物』（2017年）でプランナーとして呼んでくださって。やりたいことを出し切ろうと挑みました。

――『さいごの1つ前』の谷口さんのヘアメイクは印象的でした。

演出家の松井周さんからいただいたリクエストは「エラーのある世界」。髪色が2色だったり、少し前髪が欠けていたり、おさげが片方短かったり――といったプランを出しました。

ヘアで大事にしているのは、役者さんと衣裳に合っていること。台本を読んでから、キャラクターの性格を頭に入れたうえでプランを考え、最後は衣裳プランに合わせて詰めていきます。地毛よりも、ウィッグのほうが色や形はつくりやすい。でも舞台の邪魔になるような違和感は出したくないので、粉を振ってマットに仕上げたり、わざとトップに短い毛をつくったりしますね。

舞台のメイクは、キャラクターをつくるためにより演出的になります。表情を大きく見せるテクニックを使ったり、照明さんとの兼ね合いで陰影のつけ方も考えたり。様々な要素が絡み合うなかでものづくりできるのが、この仕事の醍醐味です。

公益財団法人
神奈川芸術文化財団

神奈川文化プログラム MAGCUL マグカル

神奈川芸術プレス 読者アンケート

神奈川芸術プレス（vol.164）をお読みいただき、ありがとうございました。アンケートにお答えいただいた方のなかから、抽選で1組2名様を、2024年7月5日（金）19:00開演『NDT（ネザーランド・ダンス・シアター）プレミアム・ジャパン・ツアー2024』神奈川県民ホール 大ホール公演にご招待いたします。今後の誌面づくりに生かすため、ぜひご意見・ご感想をお寄せください。

アンケート項目

1. 神奈川芸術プレスはいかがでしたか。ご意見・ご感想を教えてください。
2. 今号で印象に残った記事を教えてください。
3. 次号以降、読んでみたい特集テーマがあれば教えてください。
4. 今気になっている「ひと」や「こと」、「場所」などがあれば教えてください。
5. 神奈川芸術プレスをどちらでお手に取りましたか？

応募方法：「WEBアンケートフォーム」もしくは「はがき」に、
アンケートの答えと、メールアドレスを明記のうえ、ご応募ください。

WEBアンケートフォーム：https://krs.bz/kanagawaaf/m/questionnaire_164

はがき郵送先：〒231-0023　横浜市中区山下町3-1
（公財）神奈川芸術文化財団 神奈川芸術プレス読者アンケート係

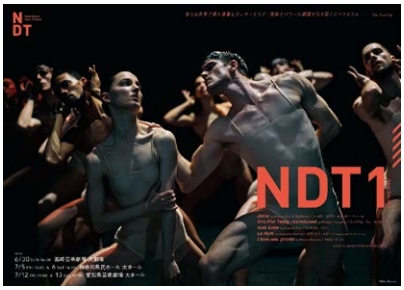
回答期限／はがき必着：2024年5月31日（金）

当選発表：厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメール送信をもってかえさせていただきます。

WEBアンケートフォームはこちら

- 当選に関するお問い合わせには回答いたしかねます。
- 当選通知メールは、kaf@kanagawa-af.orgのアドレスから送付予定です。
  上記ドメインからのメールを受信できるよう、設定をご確認ください。
- メールアドレスの間違い等でメールが送信できない場合は、当選を無効にさせていただく場合があります。
  ※お申し込み時にいただいた個人情報は、当選通知以外の目的には使用いたしません。

今号のプレゼント



『NDT（ネザーランド・ダンス・シアター）プレミアム・ジャパン・ツアー2024』

NDTは世界で最も人気の高いコンテンポラリーダンスカンパニーの一つ。選び抜かれた珠玉の作品を上演します。

振付：クリスタル・パイト
ガブリエラ・カリーソ
マルコ・ゲッケ ほか

ご支援のお願い

神奈川芸術文化財団は、心豊かな芸術文化の創造に寄与するとともに、神奈川の地から世界に向けてその発信を図ることを使命として活動しております。
活動の継続にはご支援が大きな支えになります。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

○ 賛助会員：1年を通じて事業全般にご支援をいただきます。 個人賛助会員：30,000円（1口／1年）　法人賛助会員：100,000円（1口／1年）
○ 個別協賛：当財団が主催する特定の公演・事業にご支援をいただきます。 個人：30,000円～　法人：100,000円～
○ オンライン小口寄付：1,000円からクレジットカードで気軽にご寄付いただけます。

賛助会員の特典

○ ご芳名を掲載します。 ○ 財団主催公演のなかから選定した公演にご招待いたします。 ○主催公演のチケットを10%引きでご購入いただけます。 ○ 限定イベントにご招待いたします。
○ 神奈川芸術プレス（年2回発行）をお送りします。 ○ 最新のチケット情報をメールでお送りします。

お問い合わせ・お申し込み

（公財）神奈川芸術文化財団　経営企画課　https://www.kanagawa-arts.or.jp/support　電話：045-222-0551（9:00～17:00／土日祝日・年末年始を除く）

（公財）神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

五十音順・敬称略（2024年1月31日現在）

[賛助会員]

法人賛助会員：株式会社アクトエンジニアリング / アズビル株式会社 / 学校法人岩崎学園 / 株式会社ヴォートル / 株式会社エス･シー･アライアンス / 株式会社NHKアート / 鹿島建設株式会社横浜支店 / 株式会社勝烈庵 / 一般財団法人神奈川県教育福祉振興会 / 株式会社神奈川孔文社 / 株式会社神奈川保健事業社 / 神谷コーポレーション株式会社 / カヤバCS株式会社 / 川本工業株式会社 / 株式会社共栄社 / 株式会社KSP / 株式会社合同通信 / 株式会社ジェイコム湘南･神奈川 / 株式会社シグマコミュニケーションズ / 株式会社清光社 / 株式会社テレビ神奈川 / 東工株式会社 / 株式会社日建設計 / 日成工事株式会社 / 日生商工株式会社 / 日総ブレイン株式会社 / 日本発条株式会社 / 株式会社野毛印刷社 / パナソニックEWエンジニアリング株式会社 / Piascore株式会社 / 平安堂薬局 / 株式会社ホテル、ニューグランド / 一般社団法人本牧関連産業振興協会 / 丸茂電機株式会社 / 三沢電機株式会社 / 森平舞台機構株式会社 / ヤマハサウンドシステム株式会社 / 株式会社有隣堂 / 株式会社豊商会 / 株式会社ユニコーン / 株式会社横浜アーチスト / 横浜信用金庫 / 弁護士法人横浜パートナー法律事務所 / 横浜ビルシステム株式会社 / 株式会社ワイイーシーソリューションズ / 匿名 2社

永年個人賛助会員：延命政之 / 川村恒明 / 小山明枝

個人賛助会員：味田健一 / 小川 浩 / 黒瀬博靖 / 鈴木真由美 / 髙岡俊之 / 高野伊久男 / 田中浩司 / 戸張 実 / 中澤守正 / 橋本尚子 / 松森 繁 / 山口健太郎 / 匿名 5名

[協賛・協力・寄付]

能舞台協賛：ナイス株式会社

個別協賛：アートコートギャラリー / アクセンチュア 芸術部／Accenture Art Salon / 味奈登庵 / MMcc（みなとみらいコミュニティクラブ）/ リコー社会貢献クラブ･FreeWill / 株式会社ルーク / 匿名 1社

協力：株式会社崎陽軒 / 日本化工機材株式会社 / 株式会社富士住建 / 株式会社キョードー横浜

一般寄付：匿名 2名

神奈川芸術プレス vol.164　発行：公益財団法人神奈川芸術文化財団　TEL：045-222-0551
2024年（令和6年）3月21日 発行

企画・制作：公益財団法人神奈川芸術文化財団、株式会社ボイズ
編集ディレクション：及位友美（voids）　編集：安部見空・中尾江利・裴 潤心（voids）　企画協力：山﨑健太
デザイン：岡部正裕（voids）＋三浦佑介（shubidua）　イラストレーション：白尾可奈子　校正・校閲：聚珍社　印刷：深雪印刷

神奈川芸術プレス WEB版はこちらから

【禁無断転載・複写】無料配布
※本誌掲載情報は2024年3月5日現在のもの